

# 無いもの貸し升！損料 屋

紫 李鳥

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

江戸の損料屋を舞台にした、コメディ。男勝りのお沙希が繰り広げる恋と捕り物。

九 八 七 六 五 四 三 二 一

--	--	--	--	--	--	--	--	--

61 52 44 37 29 22 15 8 1

目次



江戸は根津の一角に、《無いもの貸し升》<sup>ます</sup>という損料屋<sup>そんりょうや</sup>がありました。

ま、今でいうレンタルショップみたいなもので、レンタルしていたものをざっと並べてみると、お鍋や窯、布団や下着のふんどしまで、料理道具や日用品から冠婚葬祭、旅行道具とありとあらゆるものをレンタルショップの損料屋から借りていたわけだ。

さて、話は戻りますが、「無いものが無い！」というのを謳い<sup>うた</sup>文句にして、客を集めてたわけだが、この店は代々豪商の家系<sup>かじよく</sup>でして、貨殖の才があつたんでしよう、蔵にも店にも所狭しとんやかんや置いてるわけですな。

現在、この店を継いでいるのが、お沙希ちゃん<sup>さき</sup>だ。年の頃は十八、九。いわゆる「番茶も出花」<sup>つて</sup>奴だ。

ところが、このお沙希ちゃん、花も恥じらう年頃ながら、何がそうさせたのか、それとは正反対の男っぽい性格で、長年仕える番頭の新蔵<sup>しんぞう</sup>や女中頭のお亀<sup>かめ</sup>も手を焼く始末だ。

「おう、新蔵。昨日の儲け、一文足りねえじゃねえか。もういつペン、算盤を弾いてみな」  
帳簿を手にしたお沙希は容赦ない。

「へえ、すんません」

番頭の新蔵は、親子ほども年の離れたお沙希に形無しだ。

「こちとら、慈善事業でやってんじゃねえんだ。一銭でも勘定が合わなきや、合うまで寝かせねえよ」

可愛い顔して、言うことがキツイね、どうも。

「寒気がする。……風邪かな」

一方、こっちは長屋住まいの太助だ。年の頃は、二十二、三とそこか。月代に、斜め丁髷を載つけて、なかなかのイケメンだ。

「困ったね。夏風邪は質が悪いからね」

こっちは、太助のおふくろ、お稲だ。

「一晩寝たら治るだろ」

「薬を買うお金はないし。……なんか温かいもんでも作るよ。汗をかいたら治るかも」

お稲は内職の手を止めると、腰を上げた。

「……すまねえ」

太助は、寒そうに重ね着をした。

「あらつ、鍋に穴があいてる。これじゃ使えないわ。待っておくれ、《無いもの貸し升》で借りてくる。布団敷いて寝てな」

お稲は急いで下駄を履いた。

「……すまねえ」

「……すんません」

お稲は初めて、《無いもの貸し升》の暖簾のれんをくぐった。

「へい、いらつしやい！」

外股で奥から現れたのは、お沙希だ。本来なら、帳場格子には番頭の新蔵が居るんですが、ご存じのとおり、昨日の勘定が一文足りなかつたもんだから、まだ奥で算盤を弾いているわけでした。

「……鍋を借りたいんですが」

「あいよつ。いま、持ってくつから」

お沙希は即答すると、背を向け、また外股で奥に引つ込んだ。

「……」

「お待ちっ！」

お沙希が風呂敷に包んだ鍋を手にして戻ってきた。

「……幾ら……ですか？」

いかにも聞きづらそうだ。

「なあに、金は要らないよ」

「えっ！」

お稲は自分の耳を疑った。

なんだなんだ？先刻の新蔵に言った文句とはえれえ違いじゃねえか。

「なあに、腐るほどあるからさ、一つあげるよ」

「……でも、そんな」

「いいっていいって。ほらほら」

お沙希のしゃべり方は、まるでじじいみてえだ。

「ありがとうございます」

お稲は深々と頭を下げた。

そうなんですネ。お沙希がお金を取るのには、生活に余裕がありそうな客からだけなん

ですなあ。

それで商売が成り立つのかと心配することあちつともねえんで。豪商のお家柄です

から、お金は余るほどあるわけでした。

つまり、趣味半分、遊び半分の商いつてこつたな。新蔵へのあの言い草も、他人に厳しく、自分に甘くの類でして、ま、単にケジメをつけるための決まり文句だったわけだ。

「いい人だったよ。とつても可愛い子でね、気性もさつぱりしてて」

お稲は、お沙希の話をしながら、「豆腐やネギを入れた鍋を作った。

「……へえー」

ここで、太助が、お沙希に興味を持つわけですな。

その翌日、寒気が収まった太助は、お稲が褒めたお沙希の見物がたら、鍋を包んでいた風呂敷を手に、《無いもの貸し升》の暖簾をくぐつた。

あれつ、今日も新蔵が居ねえや。つてこたあ、まだ昨日の帳尻が合つてねえな。

「……すみません」

「いらつしやいー！」

廊下の奥から威勢のいいお沙希の声があるつてえと、外股でやつて来た。

が、太助の顔を見た途端<sup>とたん</sup>、内股に変更だ。

「……ようこそ、いらつしやいませ」

俄然、ご丁寧な接客態度だ。

「あ、おふくろに鍋をありがとうございました。風呂敷をお返しに来ました」  
綺麗に畳んだ風呂敷を差し出した。

「……まあ、昨日のお鍋の」

風呂敷を受け取ると、しおらしく俯いた。

「……じゃ」

太助が背を向けようとした、その時、

「あとう」

お沙希が呼び止めた。

「……はい？」

「……実は、番頭さんに叱られて」

「は？」

意味が分からねえ太助は、口を半開きにした顔を、正座したお沙希に向けた。

「……貸し賃、十九文、ちゃんと頂きなさい、と」

お沙希は鍋のことを言った。

「あ、やっぱそうですよね。お宅も商売ですもんね」

「……ごめんなさい」

「いいえ、とんでもないです。……けど、いま、持ち合わせが」

「あ、いえ、今日じゃなくてもいいです。ここに住まいと名前を書いてくだされば」

お沙希は急いで通い帳と筆を手渡した。

「あ、はい」

筆を動かす太助の横顔を見つめながら、お沙希は長いまつげをパチパチさせると、意味深な笑みを浮かべた。

この、お金の催促は、お沙希の思いつきだったわけですな。

つまり、太助に一目惚れしたお沙希が考えた、繋がりを切らないようにするための手段だったわけだ。――

太助さんか……。通い帳を胸元に置きながら、お沙希はニコツとした。

その頃、裏長屋では、遊び人安<sup>やす</sup>吉<sup>きち</sup>の刺殺死体が、湯<sup>ゆ</sup>屋<sup>や</sup>から戻った内縁の妻、お苑<sup>えん</sup>によつて発見された。

岡つ引きの兵治<sup>へいじ</sup>は、下<sup>げ</sup>手<sup>しゅ</sup>人<sup>にん</sup>として、隣の住人、太助を引つ張つた。

太助は、安<sup>やす</sup>吉<sup>きち</sup>にお金を貸していたという、お苑の証言により、借金を返さない安<sup>やす</sup>吉<sup>きち</sup>に逆上して包丁で刺した、と兵治は見た。

一方、太助のほうは、

「俺は殺つてませんよ、風邪で寝込んでたんですから。それにお金も貸してません。何かの間違いですよ」

と、風邪で寝込んでいたことと、お金の貸し借りはなかったことを主張した。だが、お苑の証言を鵜呑みにした兵治は、聞く耳を持たなかった。

「……………ごめんください」

「あいよっ—」

外股で奥から出てきたお沙希は、お稲の顔を見た途端、慌てて内股に変えた。

「これはこれは、いらつしやいませ」

「お金、遅くなつて申し訳ございません」

お稲は深々と頭を下げた。

「あつ、あれね？なんか要らないそうです」

「は？」

巾着を出したお稲が唾然あぜんとした。

「番頭さんいわく、鍋しやくしに杓子が付いて十九文だそうです」

「……でも」

「ほんとにほんとに。さあさあ、しまつてしまつて」

「ありがとうございます」

お稲が頭を下げた。

「……太助さん、お元気ですか」

「……」

途端、お稲の顔が曇くもった。

「どうかしたんですか……」

「……しよつぴかれました」

お稲は辛<sup>つら</sup>そうに下を向いた。

「えっ！どうして？」

お沙希は、丸い目を更に丸くした。

「……殺しで」

「えーっ！だ、誰を」

お沙希は、めまいを覚えた。よりによって、好きになった男が人殺しだなんて。この恋は成就できないのかと、一瞬、手にした刃物を首に近づける己れの姿が目に見えかんだ。隣に住んでいた安吉という遊び人を

「……」

お稲から概要を聞いたお沙希は、早速、安吉とやらの身辺調査を始めた。――

「質の悪い男だったわよ。みんなで言ってたのよ、〃触らぬ神に祟<sup>たた</sup>りなし〃って。ね？」  
「そうそう。それより、濡れ衣で太助さんがしょっぱかれて、お稲さんも気の毒よね」

井戸端で洗濯中の丸鬚<sup>まるまげ</sup>二人は、確かな情報の提供者のようだ。

「……なんで、濡れ衣だと？」

地味めの小紋で島田に結い、化粧で老け顔にしたお沙希は、太助の親類を装うと、冷静を努めた。

「だって、いい男だもの。私があと十若とおかつたら、もう放っておかないんだけどね」

「あたいだってそうだよ。うっとりするような色男だもん。人殺しの顔じゃないわよ。あんたもそう思うだろ？」

「ええ。で、お苑という女のほうは？」

お沙希が訊いた途端、二人は目配せすると、

「どれどれ、洗濯もんを干さない」と

いそいそと腰を上げた。

……何かあるな。自分で調べるしかないか。お沙希は外股で番屋に向かった。――

「あ、《無いもの貸し升》のお嬢さんじゃねえですか。こりや、どうも」

「こりやどーもじゃねえよ。おう、兵治。太助をしよつぴいたらしいが、確固たる証拠はあんのか？」

「……そりや、あるさ。お苑の証言よ」

「その、お苑とやらは内縁の妻らしいじゃねえか。そんな女の証言は信憑性しんぴょうせいに欠けるんじゃないわえか？」

「……けど」

「けどじゃねえよ。本人は風邪で寝てたって言ったろ？」

「……なんで知ってんですか？」

「なんでって、太助のおふくろがうちに来て、鍋を借りに来た理由を教えてくださいましたからよ」

「……の振りをした可能性もあるじゃねえですか」

「こう見えても、私の目は確かだ。あら、めんこいわねって言われてた頃から、いろんな人間を見てきたんだ。太助は人殺しの顔じゃねえ。私が保証するよ。早く、お縄をほどこいてやりな」

「……けど」

「けどじゃねえよ。太助を家に帰さねえと、お前さんの秘密を隣近所に言いふらすよ」  
「えー？それだけはやめてよっ！」

「太助、おかえり。よかったね、無罪放免になつて」

お稲は嬉しそうに太助を迎えた。

「ああ。だがどうして、突然、無罪になつたんだろ……」

一方、太助が無罪になったことを知つたお苑は、苦虫を噛み潰したような顔で、  
切齒扼腕した。

お苑は、年の頃は二十五、六つてとこだ。鼻筋が通つてつから、ま、いい女の部類だ。仕事はつてえと、盛り場の矢場で矢場女をしてましてね。

矢場つてえのは、楊弓場のこと<sup>ようきゆうば</sup>でして。客が、二尺八寸(約85センチ)の楊弓で、九寸(27センチ)の矢を射るわけですな。

矢場女つてえのは、客の射つた矢を拾つたり、「当たり〜」と声をあげ、矢を戻したりするんですが、ま、この矢場女は色を売つていふという噂も無きにしも非ずでして。――

「おう、こりゃあ、めんこいのう。名は？」

矢場の店主は、面接に来たお沙希を見てご満悦だ。

「おサツキと申します」

「うむ……、斬新な名じやのう」

「はい。サツキも言われました」

「……で、どうしてまた、矢場女になろうと？」

「はい。父ちゃんも母ちゃんもいません。親戚に預けられて、早二十年。私を育ててくれた叔母<sup>おば</sup>さんに、感謝・感激・雨・アラレちゃんです。そこで、叔母さんの教育方針で培つた奉仕の精神が、何か人の役に立ちたいという、燃えたぎる情熱を――」

「で、なんで、矢場女になろうと？」

「ステキな人に射止められたくて」

「んん、粹だね。じゃ、明日から頼むよ」

「合点でい！」

「……」

作り話とは言え、おしとやかだったのは最初のうちだけだ。つたく、最後には地が出ちまつて、も。店主も呆れ顔だ。

「おう、お苑。おサツキーちゃんだ。色々教えてやつてくれ」

店主はお沙希を紹介すると出ていった。

「……あいよ」

お苑は、意地の悪そうな目つきでお沙希をチラツと見た。

「おサツキーです。よろしくお願いしまゝす」

「一回しか言わないから、よく聞きな」

お苑は矢を手にするると、お沙希を睨みつけた。

「は、は、はいっ」

おう、こわ。……けど、郷に入つては郷に従えだ。虫が好かないが、我慢してお苑に合わすつか。

——三日ほど見張ると、お苑にボロが出始めた。それは、客との卑猥な会話だった。この女、春を売ってやがんな。ったくよー、安吉を亡くして間もねえつてのに、もう

別の男か？冷たい女だぜ。

そんな時、いつもより早めに店に行き、勝手口から入ると、座敷のほうからお苑と男の話し声が聞こえた。

「でえじようぶだよ、バレやしねえって」

「氣いつけておくれよ、あんたなしじや生きていけないんだから」

半身はんみで覗くと、他に客が居ないのをいいことに、男の胸元に、のの字なんか書きちゃつて、イチヤイチャしてやがんの。

……お苑の新しい男か？

「ねえ、米助よねすけさん。賭場とばで稼いで、私に贅沢ぜいたくさせておくれよ」

「分かつてるよ。おめえと一緒にするためなら、なんでもやるよ。安吉を殺ったんだつて、おめえを奪うためだから——」

！………つてことは、この、米助つてえのが安吉を殺ったのか！ス、ス、スクープだぜつ！ど、ど、どうしよう、腰を抜かしそう。ああああ、半身だから倒れそう。………バタンと倒れたら二人に気づかれる。太助さん、タスケてー！

と、その時、

「おう、やってつか！」

男の声。

「は〜い」

お苑の声。

よかつた。客が来てくれた。お沙希はホツとすると腰を下ろした。米助とやらは客と入れ違いに出ていった。

米助か……。さて、兵治の手柄にしてやるか。お沙希は、兵治に情報を提供すると帰宅した。――

「お嬢さん。毎日毎日、どちらにお出掛けですか？」

あれっ。久しぶりに《無いもの貸し升》を覗いたが、新蔵が帳場格子に座つてら。そりやそうだ。お沙希はお苑を謀報ちようほうするため留守してたんですもんね。新蔵が居て当然だ。

「いちいち断ことわんなきやいけねえのか？あー？ガキじゃあるめえしよー」

なんてえ口の利き方だ、つたく。まだ乙女の部類にランク付けされる年頃だぜ。

「……へえ。すんません」

新蔵も意気地いけじがねえなあ。えー？ピシツと言つてやりなよ。「もう少し女らしくしなさい」つてよ。

「ああ、腹減った。めしは？」

「……お亀がご用意を」

「じゃ、食つてくつかな。おう、新蔵。勘定は合つてんだろな？一文でも足りねえと、合  
うまで、めし食わせねえよ」

「……へ」

つたく、かわいそつ可哀想な新蔵。語りのおいらと同姓だから肩を持つわけじゃねえが、新蔵に  
同情しちまうよ。ほんと。俺が新蔵なら、お沙希の横よこつ面つらをバシッと一発張り倒して、  
「なんでえ、その口の利き方は。もう少し女らしくしろっ！」って、言つてやりてえねえ。  
……許されるなら。

一方、大番屋では、兵治がしよつぴいた米助を牢屋に入れると、同心がお苑を取り調  
べた。

「どうして、太助を犯人にしたんだ」

「……恋心を打ち明けたら、素っ気なくされて、癪しやくに障さつてさ。安吉は私の稼せいだ金を当  
てにして働かないから、別れたかった。けど、そのたんびに暴力を振るわれて。

そんな時、矢場の客だった米助に出会った。米助は私にベタ惚ほれだったから利用した  
のよ。

あの日、太助さんが風邪で仕事を休んでるのを知った私は、昼間つから酔っ払って寝てる安吉に気づかれないように米助に会いに行くと、殺しを頼んだ。

私に惚れてた米助は、二つ返事で承諾したわ——」

「お嬢さん、この度は、下手人の件、ありがとうございました」

兵治が客間で平身低頭した。

「いいっていいって。おめえさんの手柄になって何よりだ」

お沙希はじじいみてえなしやべり方をしながら、お亀が淹れた茶を飲んだ。

「下手人を挙げてくれた上に、秘密も暴露しないで頂いて、ほんとに恩に着ます。そこで、お願いなんですが」

「なんでい？お願いって」

「私の手助けをしてもらえないでしょうか」

「手助けだあ？なんでい、足でも挫いたか？」

「いえ。岡つ引きを頼みてえんで」

「なんでい、そんなことか。……ん？岡つ引き？えー？この、わ、た、しが？」

「え。頼んます」

「……マジで？」

「マジマジ」

と言うことで、お沙希は兵治のアシストをすることになった。今回の殺しの件に貢献したことで腕を買われたんだろが、ま、《無いもの貸し升》は新蔵が居るし、お沙希のほうは暇つてええ、暇なんすけどね。

間もなくして、お稲が《無いもの貸し升》にやつて来た。

新蔵は野暮用で外出中だ。

客間に通すと、お亀が茶を淹れた。

「太助が戻ってきたもんですから、ご報告をと思ひ」

「そりゃ、よかつたじゃないですか」

「ありがとうございます。……で」

「え？」

「藪から棒なんです、よかつたら、今度うちに遊びに来てくださいませ」

「えー？」

お沙希は<sup>おおげき</sup>大袈裟に驚きながらも、腹ん中ではニヤニヤだ。そりゃ、当然だな。太助は意中の人だ。太助に会えるつてんで、頭の中は、お花畑にてふてふが飛んでる状態よ。

だ。そこに、手を繋いだお沙希と太助がスキップしながら現れるってえシチュエーション

## 四

空想に耽るお沙希の顔はデレつとしちやつて、まるでアホづらよ。あくあく、だらしねえ。

「……お嬢さん？」

「ああああ、どうも。じゃ、お言葉に甘えて、明日、遊びに伺います」  
「ええ。お待ちします」

翌日、お沙希は、箆笥たんすの肥やしになつて、山ほどある呉服の中から、  
「どれにしようかな。か・み・さ・ま・の・い・う・と・お・り」

と、人差し指が止まったのを選ぶと、お亀に着せてもらった。  
最後に、お気に入りさんごの珊瑚かんざしの簪しなを挿すと、品しなを作った。――

「……こんにちは」

お沙希は、来る途中で棒手振ぼてふりから買った朝顔の鉢を手土産にした。

「は〜いつ」

中から、お稲の声だ。すぐに障子戸を開けたお稲は、お沙希を見るなり、満面の笑みよ。

「まあ、お嬢さん。これはこれは、よくおいでくださいました。さあさあ、どうぞお入りください」

「これ。来る途中で花売りに遇あつたもんですから」

鉢を差し出した。

「まあ、キレイ。こんなこととして頂いて、ありがとうございます。さあさあ、どうぞ。汚いところですけど」

「では、失礼します」

「太助はもうじき帰りますので、お茶でも淹れましょうね」

「どうぞ、お構いなく」

「さあさあ、くつろいでください」

「は〜い」

とりあえずぶりっ子か？

お稲は朝顔を隅に置くと、

「まー、キレイ。掃き溜めに鶴ですね。ありがとうございます」

と、涼しげな朝顔にご心酔だ。

「そんな大したものじゃ……」

気が緩んだお沙希は、手を横に振りながら、じじいみてえな仕草で恐縮した。つたく。お沙希、じじいみてえになつてるよ。(小声で教えてやる語り)

お稲が団扇でお沙希に風を送りながら、たわいない話に花を咲かせていると、間もなくして、鯉口シヤツに黒腹掛けの太助が帰つてきた。

太助と目が合った途端、お沙希は頬を染めた。

「あつ」

太助のほうも予期せぬ客に驚いた。

「……こんばんは」

お沙希は正座をし直すと、恥じらうように俯いた。

「あ、こんばんは」

「太助、おかえり。母さんが無理矢理誘つたんだよ」

「そんなこと……」

「こんな小汚いところに、ようこそおいでなすつた」

「こちらこそ、こんな時分に伺つて……」

まつげをパチパチさせながら太助を見た。

「どうぞ、ゆつくりしてください」

太助は、杓子ですくった水で手を洗うと、掛かった手ぬぐいで拭いた。

「さて、夕飯にするかね。お嬢さんも一緒に食べてくださいね」

そう言つて、お稲は膳を出した。

「ええ。遠慮なく」

「お嬢さんがいらしてくれただから、今夜は酒をつけるかね。お嬢さん、酒は大丈夫ですか？」

「あ、たしなむ程度で」

「じゃ、たしなむてください」

お稲はそう言いながら、徳利を出した。

「先日は、鍋をありがとうございました」

「え？あ、いいえ。お風邪のほうは、お治りになりました？」

「あら、ヤだ。お沙希ちゃん、間違つた敬語の使い方してますよ。〔小声で教える語り〕

「え、おかげさんで。けど、今日も親方に叱られて」

「え？」

「おめえは、筋がねいつて」

「……お仕事は何を？」

「あ、左官の見習いです。いい歳こいて、まだ一人前になれなくて。今日も、うまくできなくて、親方に大目玉を食らつて」

お沙希は、ぼそぼそ喋る太助の横顔に見とれていた。

「……そのうちに上手じょうずになられますわ。……きつと」

「だといいんですが……」

「はいはい、出来ましたよ。さつき棒手振りから買ったお寿司ですが」

お稲が寿司と一緒に徳利と猪口ちよこを盆で運んできた。

「わあ、おいしそう」

お沙希は、感激すると、

「さあ、どうぞ」

と、お稲が徳利を持った。

「あ、はい」

お沙希は猪口を手にすると、お稲が注いだ。

太助とお稲は自分で注いだ。

「お嬢さん、おいでくださって、ありがとうございます」

そう言つて、お稲は猪口を上げた。

「ようこそ、おいでくださいつた」

太助も猪口を手にした。

「お招き頂き、ありがとうございます」

そう言つて、猪口に口をつけた。

「寿司も召し上がってください」

「はい」

お稲の言葉に甘えると、嘗める程度で猪口を置き、寿司に箸をつけた。

「うくん、おいしい」

お沙希は、旨<sup>うま</sup>そうに寿司を頬張ると、ご満悦の表情だ。

お稲に勧められて、猪口の二、三杯も飲むと、お沙希は顔がまっかつかになつちまつて、まるでゆでダコみてえだ。

——ふらつくお沙希を支えながら、太助がエスコートしてるんですがね？太助の胸元に寄りかかったお沙希の簪<sup>かんざし</sup>が、月明かりに光沢を帯びて、んん、なかなかのシチュエーシヨンじゃねえか。

「ヒック」

「まったく、しゃっくりか？折角、いいムードなのによ、色気もへったくれもないな。」

「あつ、痛いっ」

「ど、どうした？……あああ、よろけた拍子ひょうしに足を挫くじいたみたいだ。」

「お嬢さん、大丈夫ですか？」

「太助はそう言いながら、急いでお沙希の足を擦さすってやった。」

「ヒック」

「まったく、またしゃっくりか？酩酊状態めいていのお沙希は、脳だけじゃなく、感度まで鈍にぶくなつちまつて、虚ろな目うつを開けたり閉じたりだ。」

「ふあ〜〜〜」

「まったく、今度はあくびかあ？おう、お沙希、起きろっ！太助がおめえの足を擦さすってるぜ！嬉しくねえのかー！（大声で教えてやる語り）」

「ヒック」

「駄目だ、こりや……。」

——戸を開けた新蔵にお沙希を届けると、太助は来た道に戻った。

## 五

翌日の明け六ツ（午前6時）。

「お嬢さん、兵治さんです！」

襖越しに新蔵の声だ。

「……ううう……も、うっさいっ！」

昨日の今日ですからね？まだ、アルコールが残ってる状態だ。

「お嬢さん、兵治さんがおいでです！」

「……つたく、朝っぱらからなんかい？」

「殺しっ！だそうです」

「ん？殺しだ？……あー、そうだ。岡っ引きの手伝い頼まれてたんだ」

お沙希は急いで布団から出ると、支度を始めた。――

「お嬢さん、酒臭いっすね？」

小走りの兵治が、新蔵から借りた小袖の着流しにほっかぶりしたお沙希に顔を歪ゆがめ

た。

「あ、ゆんべ、ちよつとね」

「むう……、捜査のほう、しつかり頼んまずぜ」

「その辺は抜かりはねえさ」

「むう……、頼りましたよ」

——<sup>むしろ</sup>筵<sup>めく</sup>を捲つて現れた、うつ伏せになつた男の横顔を見て、お沙希は、あつと短い声を発した。

と言うのも、知つた顔だつたんですな、これが。

「これは、両替屋の主<sup>あるじ</sup>嘉右衛門<sup>かえもん</sup>じゃねえか」

「えっ？ 間違いないっすか」

「しよつちゆううちの商品を借りてた上客よ。間違えるわけねえ」

「ありがとうございます。早速、与力の旦那に報告します」

「ああ。……おう、金子<sup>きんす</sup>は？」

「いや、無かつた。盗まれた可能性もあるが——」

「最初から持つてなかつた可能性もあるか……」

「首の後ろを刃物で刺されてるつてことは、相手はよつぽどの大男つてことになります

ね」

「うむ……死後どのぐらいだ？」

「血の色と固まり具合から見て、ゆんべの五ツ（午後8時）から四ツ（午後10時）ぐれいですね」

「五ツ？」

（太助さんちに居た頃か……）

お沙希は男みために懷に手を入れると、長<sup>ちやうたいぞく</sup>大息をした。――

「お嬢さん、おかえりなさいませ」

「つたく、朝つぱらから起こされて。岡つ引きの手伝いも樂じゃねーな。あく、腹減つた。めしは？」

ほつかぶりの手ぬぐいを取りながら、草履<sup>ぞうり</sup>を脱いだ。

「お亀がご用意を――」

「おう、新蔵。勘定のほうは合つてんだろな？合わなきや、めし抜きだぜ」

「へ。おかげさんで合つてるようで」

「チツ」

つたく、舌打ちなんかしちまつて。どうしてこうも新蔵<sup>ないがし</sup>を蔑ろにするんざんしよね？

今頃になって言うのもなんですが、ま、これには深い理由わけがあるんざんす。

「あ、お嬢さん。酒を呑むのは構いませんが、ゆんべみたいに、若い男におんぶされるような真似はしないでください」

おー、新蔵も言う時は言うね。案外、カッコいいじゃん。

「な、なぬう！おんぶだ？」

泥酔でいすいしていたお沙希は、ゆんべのことを覚えちゃいねいんですな、どうも。

「そうですよ。ここまでおんぶして来たんですよ」

「うっそー！ヤード、どうしよう……」

（なんか、みつともないこととか、恥ずかしいこととかしなかったかな……。あくあ、嫌われたらどうしよう……。初恋の人なのにい）

「お嬢さん、聞いてますか？」

「うっさいっ！おんぶごっこしてたんだよっ！ガキン時から親が居なかつたんでねっ！親におんぶされたことねえからよっ！」

新蔵を睨み付けながら怒鳴るお沙希の目には、涙が溢れていたのであった。

「……」

新蔵は返す言葉もなく、心痛な面持ちで俯いたのであった。と、ま、こんな具合でい。ね？結構、奥が深いっしょ？涙あり、笑いありの人情物だ。こちらら江戸っ子は、こう

いう人情物に弱いだよ。

——朝飯を済ましたお沙希は、帳簿に記載された、嘉右衛門の貸し賃及び商品の照合などをした。

……雪舟の掛軸と信楽の壺が戻ってねえか。

その足で、嘉右衛門の屋敷に向かった。——主を亡くした佇まいは森閑しんかんとしていた。

「ちわー！ 《無いもの貸し升》です！」

「はーい、只今ただいま」

女中らしき年増としまが小走りでやって来た。

「《無いもの貸し升》ですが、ご主人はおいでですか」

お沙希はすつとぼけて訊いた。

「……お亡くなり」

女中は声を詰まらせた。

「えーっ！」

お沙希は大袈裟おおげさに驚いてみせた。

「（ご）病気で？」

またまた、すつとぼけた。芝居が上手うまいね、どうも。

「いえ、……ころ」

「えーっ！」

驚くのが、ちつとばつか早いよ。まだ、「コロ」しか言つてねえじゃねえか。つたよ、芝居が上手いねーつて、ちつとばつか褒めたら、調子に乗りやがつて。「コロサレ」「ぐれえで驚くんだよ。万が一にも、「コロモガエ」とか、「コロンデ」とかだつたらどうすんでい。つたく、おつちよこちよいだなあ。

「え？いま、なんて？」

よしよし。フオローも上手いじゃん。

「殺されて……」

「えーっ！」

よし、来た！その調子だ。

「だ、誰に？」

「……まだ、そこまでは」

「……こんな時に言いづらいんですが、実は、嘉右衛門さんに貸してる商品があるもんで。期限が今日なんですよ。話の分かる人はいらつしやいますか」

「はい。では、ご新造しんぞ（若い嫁）さんにお伝えします」

「……………」

(ん?ご)新造だ?……嘉右衛門は確か、寡やもめのはず。後妻か?)

——客間の床の間には、信楽の壺が置かれ、雪舟の掛軸があつた。女中が運んできたお茶を飲みながら、お沙希が掛軸の水墨画を鑑賞しているつてえと、

「失礼します」

の声と共に、色っぽい女が襖を開けた。

お沙希は慌てて座り直すと、軽い咳払いをした。

「まあまあ、《無いもの貸し升》のお嬢様で。お話は主人から伺っております。ようこそ、

おいでくださいました。お梗きょうと申します」

お梗ざれいが座礼ざれいをした。

「お沙希と申します。こちらこそ、お世話になっております」

お沙希も頭を下げた。

「この度は、ご不幸があつたことも知らず、不躰ぶたいけに伺い、申し訳ございません」

よつ、お沙希、ご丁寧ていねいな挨拶あいさつだね、誰に習つたんでい?

「お氣遣きづかい、ありがとうございます。……突然とつぜんのことです」

お梗は顔を曇くもらせた。

「……犯人に心当たりは？」

「え？あ、……いいえ」

お梗が狼狽うろたえた。

(この女、何か知ってるな……)

「女中さんに訊いたら、神社の裏で亡くなっていたそうですが、いつ、お出かけになったんですか？嘉右衛門さんは」

「さあ。……起きたら居なくて。私はいつも、五ツぐらいには床とこに就つくもんですから、主人がその時分、何をしていたかは……」

(殺された時分を知った上での伏線か?)

……で、お梗に疑惑を抱くわけですな。

## 六

掛軸と壺を受け取ったお沙希は帰り際に、先刻の女中の袖口に幾らかの賂まいないを入れると、お梗のことを訊いた。

「はい。つい最近です。遊廓ゆうかくにいらした方で、旦那さんが大枚をはたいて、後添のちぞいにしたようです——」

(遊女か……)

「あゝい、おサツキと申しまするう」

「うむ……、斬新な名じやな？」

お梗が元いた置屋おきやの主は、可愛いお沙希にご満悦でい。

「はい。サツキも言われました」

「歳は？」

「十三。……と七つでゝす」

「うむ……、遊女になりたいと言うことだが、どうして？」

「はい。父ちゃんも母ちゃんもいません。親戚に預けられて、早二十年。私を育ててくれた叔母さんには、感謝・感激・雨・アラレちゃんです。そこで、叔母の教育方針である奉仕の精神が、何か人の役に立ちたいという、燃えたぎる情熱を——」

「で、なんで、遊女になりたいと?」

「江戸一番の色っぽい女になりたいくて」

「ん、粹だね。明日から来ておくれ」

「合点でい!」

「……」

合点でいいいが、ほんとに遊女になるつもりか?でいじょうぶかなあ……。心配だなあ。

「おサツキーちゃんだ。世話してやってくれ」

置屋の主は、鎗手やりて(遊女の世話をする女)にお沙希を紹介すると出ていった。

「おサツキーでくす」

「ん、可愛いね。あんたの器量なら、遊廓一の売れっ子になれるよ。この私が太鼓判を押すよ」

「あざっす」

「まず、廓くわく詞わことばを覚えないとね」

「あゝい」

「いいじゃん、いいじゃん。おサツキーちゃんは素質があるかもよ」

「あゝゝゝい」

「……」

お沙希、調子に乗るなって。ほら、鎗手が啞然としてるぜ。

鎗手を手中に収めたお沙希は、早速幾らかの袖の下をやった。

「……これは？」

訳の分からねえ金子に、鎗手が訳の分からねえ顔を向けた。

「ごめんなさい。実は、折り入ってお話が……」

お沙希は、岡つ引きの手伝いをしてることを明かすつてえと、お梗のことを訊いた。

なるほど。本気で遊女になるつてんじやなくて、矢場女おどりん時と同様、おとり捜査つて奴か

? あゝ、安心した。やつぱ、あつたまいい。さすが、俺が憧憬するお沙希でい。……好

きだぜ、お沙希（呟く語り）

「そうなのよ。嘉右衛門の旦那に見初みせめられてね——」

「お梗さんに、男の影は？」

「……まあ、あれだけの女だから、噂が無いわけじゃないけどね……」

略の上乗せを察したお沙希は、慌てて巾着を出した。

「ったく、鎗手だけあって、その通りの遣り手だな。えー？お沙希。」

脇を開けた鎗手の袖口にお沙希が金子を入れるてえと、鎗手は二倍のえびす顔よ。

「あら、どうも。……お梗の馴染み客で、与市っていう、博打打ちなんだけどね——」  
(博打打ちの与市か……。さて、兵治の手柄にさせてやるか)

——兵治に情報提供すると、帰宅した。

「お嬢さん、おかえりなさいませ」

「おう、新蔵——」

「勘定は合っています。食事も出来て——」

「うっせー！先走りすんじゃねえ！こつちが訊いてから答えろっ！こちとら、独自のりズムってえのがあるんでい。勝手に乱すんじゃねーっ！」

「……すんません」

「あく、腹減った。めしは？」

「……お亀がご用意を」

「おう、新蔵。勘定のほうは合ってたんだろな？合ってなきや、めし抜きの上に寝かせねえからな」

「……へ」

「つたく、気がつけないな、お沙希は。もうちつと、優しくしてやりなよ。おめえの、おとつ、あつ！てえへん、てえへん。口が滑りそうになつちまつた。まじい、まじい。完結までオフレコつてえ約束だったんだ。ここで暴露なんぞしたら、原作者に途中降板されちまうかもしんねえ。折角、ナレーションの仕事を頂いたのに、ここでしくじつちまつたら、これまでの立て板に水が水の泡でい。氣いつけねえとな。こうなると、あんまり立て板に水も考えもんだなあ。——」

「お嬢様。最近、なんかいいことでもありました？」

お亀が、いわし鰯の小骨を抜きながら、含み笑いをした。

「え？……なんで？」

「女らしくなつたから」

「えっ！うっそ！ほんとに？」

お亀からの思いがけない言葉に、びつくりしたお沙希は、嬉しいやら、くすぐつていやらで、複雑な心境でい。

「ええ。女の体は正直ですよ」

「……どういう意味？」

(太助さんとはまだ、手も握ってねえのに)

「女はね、恋をすると、表情や体つきまで柔らかくなるもんなんですよ」

「……へえー、そんなもんかい」

(なんだ、バレバレか)

「はい、骨を取りましたよ。召し上がれ」

お亀は、ふきん布巾で指先を拭いながら、お沙希の膳に目をやった。

「……ね、お亀」

「はい？」

「……私のおつ母さんて、……どんな人だった？」

「……それはそれは、お美しい方でしたよ。お嬢様に瓜二つの。心も美しい方でした。女中奉公の私たちにも優しくしてくれて」

「……お父つつあんは？」

「え？ああ、旦那様も優しいお方でしたよ。いつもにこやかで。……あれから、二十年近くになるんですね？」

「……お亀」

「はい？」

「……二十年も、こんな私を育ててくれて、……ありがとう」

「まあ、どうしたんですか？お嬢様。……わたくしこそ、行き届かなくて、お嬢様には迷惑ばかりかけてます」

お沙希はしよんぼりして、箸が進まなかった。

「どうですか？お味のほうは」

寂しげなお沙希に気づいて、お亀は慌てて話を変えた。

「ん？ああ、……うめえ」

「よかったあ」

——翌日の昼四ツ（午前10時）頃、お稲が《無いもの貸し升》にやつて来た。

お沙希は、兵治んところに行つて留守だ。

「……あのう」

「はい、いらつ……しゃい……ませ」

帳場格子で算盤を弾いてた新蔵は、お稲を見た途端、豆鉄砲を食つた鳩みてえな顔になつちまつた。

「お嬢様はおいでで？」

「あ、いえ。いま、ちよつと出てまして」

新蔵は格子から急いで出てくると、お稲の前に正座した。

「そうですか。……じゃあ、伝えて頂けますか？」

「え？あ、はい」

「よかつたら、また遊びに来てください、と」

「あ、はい、お伝えます。お名前は？」

「お稲と申します」

「お稲さんですね？かしこまりました。お伝えします」

「……それじゃ」

お稲がお辞儀をした。

「あ、はい、どうも……」

新蔵も頭を下げた。

あららら、背を向けたお稲の後ろ姿を見ながら、口をポカーンと開けてにやけちまつてら。

おーい！新蔵！鼻の下が伸びちまってるぜ。あくあくあく、デレくツとしちまってるで、阿呆が酔に酔ったみてえな面つらだぜ。なんでい、一目惚れか？

お沙希は太助に、新蔵はお稲に惚れちまって。先々、どうなつちまうんでい？ま、予想がつかなくもねえけどよ。……あくあく。（語りのため息）

一方、番屋では。

「お嬢さん、貴重な情報提供だったんですが、嘉右衛門が殺された時刻、与市は賭場とばに居たのが判明しました」

兵治は残念そうに、肩を落とした。

「そうかい。……つてことは、下手人は他に居るつてこつたな。けど、嘉右衛門の後妻と

与市は臭い仲だ。与市の身辺も探つたほうがいいぜ」

「へい、合がつてんしょうちのすけ点承知之助でい」

「……」

（お梗のほうを見張つてみるか……）

「お嬢さん、おかえりなさいませ」

「おう、新蔵、勘定は合つてんだろな？一文でも足りなきや、昼飯抜きだぜ」

「へ。……あ、先程、お稲さんて方がおいでに——」

「えっ！で、なんて？」

（太助さんにちなんだことかな……？）

お沙希は不安げな面持ちでい。

「また、遊びに来て——」

「えっ！ほんとに？やりーっ」

（つてことは、酔つ払つても嫌われなかつたんだ。じゃなきや、おふくろさんがわざわざ来て、また遊びに来て、なんて誘うわけないもんね？クツ。また太助さんに会えるう）

お沙希はニヤツとした。

「お嬢さん？」

「ん？うっさいっ！めしは？」

「お亀がご用意を」

「おう、新蔵。勘定のほうは合つてん——」

「それは、先程、おっしやいました」

「ムム……うっさいっ！いちいち人の揚げ足を取んじやねーっ！」

お沙希は、でっけえ足音をさせるつてえと、外股で引つ込んだ。

「……」

今すぐにも太助に会いてえお沙希だが、嘉右衛門の事件が解決してねえもんだから、ラブラブモードにはなれねえんですな。その辺のそこは、商人の娘だけあつて、しっかりしてら。つまり、ケジメって奴だ。仕事は仕事、恋は恋。公私混同はしねえ。なかなかのしっかり者だ。その辺もまた、魅力的だなあ。

——宵五ツ（午後8時）には布団に入るつて、お梗は言つてたな。それが本当かどうか、この目で確かめてみつか。

お沙希は、新蔵から借りっぱなしの小袖を着るつてえと、ほっかぶりをして、嘉右衛

門の屋敷に向かった。――

仮に外出するとしても、玄関から出入りはしないだろう、と推測したお沙希は、勝手口が見える松の木に身を隠した。――

五ツは過ぎたか……。月光に陰となった勝手口の軒下に、お沙希は目を据えていた。と、その時、音もなくやって来た黒い人影が、勝手口の戸を無造作に開けた。

ん？中から心張り棒しんぼはしてなかったのか？お沙希は不審に思った。

着流しの男は中に入ると、静かに戸を閉めた。

……誰でい？与市って奴か？お沙希は首を傾げた。――

お沙希は、お亀の部屋の雨戸を三回、軽く叩いた。帰宅したら、合図する手筈てはずになっていた。

勝手口を開けたお亀は、しよぼしよぼさせた目を擦こすった。

「……おかえりなさいませ」

「ん。おやすみ」

「おやすみなさいませ……」

——翌朝、めしを済ませたお沙希は、兵治に会いに番屋に行った。

「ゆんべの五ツ頃、与市はどこに？」

「相変わらず、賭場に入り浸りでつき」

「えっ？……」

（つてことは、あの男は与市じゃなかったのか……。ま、あとは兵治に任すつか。それより、太助さんに会いてえ）

「こんばんは〜」

江戸小紋でおしゃれに決めるつてえと、丸型の平打簪ひらうちかんざしを挿して、太助んちに遊びに来たお沙希でい。

「まあ、お嬢さん。よくおいでくださいました。さあさあ、お入りください」  
お稲は満面の笑みでい。

「これ。花売りに遇あつたものだから」

お沙希が、手にした鬼灯ほおぼきの鉢を差し出した。

「ま〜、カワイイ。いつもありがとうございます」

鉢を受け取ると、頭を下げた。

「さあさまあ、どうぞ」

「失礼します」

——暮六ツ（午後6時）頃、太助が帰ってきた。

太助と目が合った途端、お沙希は頬を染めると、

「……………くんばんは」

小さな声で言つて、俯いた。

「あ、いらつしやい」

太助も満更でもない顔だ。

「またまた、無理矢理に母さんが誘つたんだよ」

「そんなこと……………」

「迷惑でしたでしょ？」

洗つた手を手ぬぐいで拭きながら、お沙希を見た。

「いえ、うれしかったです」

蚊の鳴くような声で言つた。

「お嬢さん、お酒も付けましようね」

お稲が土間から振り向いた。

「あ、いえ。今夜はご遠慮します。番頭さんに叱られて。太助さんに迷惑が及ぶからと」  
お沙希がおんぶのことを言った。

「そんな。気にしないでください。お嬢さんをおんぶできて光栄です」

太助はそう言いながら、お沙希の前に座った。

「やだ。光栄だなんて、恥ずかしい。おほほほ」

お沙希は指先で口元を隠すつてえと、上品に笑った。似合わないけどな。ま、お沙希のやりてえようにさせとくか。

「そうですか？じゃ、ご飯だけでも食べてつてください。折角、お嬢さんのために作ったんですから」

お稲が勧めた。

「え。お言葉に甘えて頂きます」

「あく、よかった。作った甲斐かいがあつた。あ、さつき買った天ぷらも添えましようね。うふふ」

お稲は嬉しそうにご飯をよそつた。

太助と目が合ったお沙希は、恥じらうように俯いた。

## 八

——太助がお沙希を家まで送つてゐる場面だ。二人は月を見上げながら、少し間隔を置いて歩いている。

「……実は、お嬢さんのこと、前から知ってました」

「えっ！どこで？」

「隅田川の花火見物に行つた時、両国橋から川を見下ろすと、涼み舟に乗つたお嬢さんが、花火を見上げてました」

「やだあ。だつたんですか？ 恥ずかしい……」

「鍵屋！つ！なんて、声を上げて」

「うわ、めつちや恥ずかしい。どうしよう」

お沙希は恥ずかしそうに顔を覆うと、背を向けた。

「……カワイ……かつたですよ」

「えっ？ほんとに？」

急いで太助に振り向いた。

「ええ」

「……うれしい」

恥ずかしそうに俯いた。

「……お嬢さん」

「え？」

「……俺と付き合ってくれませんか？」

「え。……エッ？今なんて？」

聞き違いかと思い、聞き直した。

「……お嬢さんとおいらじゃ、月とすつぽんかもしれねえが、お嬢さんに好かれるように頑張りますから……」

（えっ！うっそー！マジで？やりーっ！）

「……今のままの太助さんで、十分ステキです」

「……ありがとうございます。けど——」

「それと、……お・さ・き・き、って呼んでほしい」

何が、お・さ・き・き、って呼んでだ。チキシヨ、腹立つなあ。男は太助だけじゃねえぜ。ここにも独身のいい男がいるぜ。……聞いてねえか。

「……お・さ・き・き……ちゃん」

「は〜い」

何が、は〜いでい。チキシヨ、ヤけるな。チツ！見つめ合つてら。早く、場面が変わんねえかなあ。

——翌日の昼四ツ（午前10時）頃。……あ、よかつた。場面が変わつて。

暇潰しに、お沙希が嘉右衛門の屋敷を見張つてゐると、やつて来た水売りが門の前で、足踏みを始めた。誰かが出てくるのを待つてゐるとえ素振りだ。

（……お梗でも待つてんのか？）

ところが、出てきたのは、例の女中だつた。水でも買うのかと思いきや、なんだか様子がおかしかつた。喋ちやうちやうなん々なんと嘯ささやき合つていた。

（女中の「色」か？無器量でも、女は女か？……だが、この二人、臭いな。——待てよ。勝手口から入つたのがお梗の男とは限らない。それに、中に居る女中なら心張り棒を外すこともできる。もしかして……）

兵治に情報提供するつてえと帰宅した。

「お嬢さん、おかえりなさいませ」

「あく、腹減った。めしは？」

「お亀がご用意を——」

「おう、新蔵。勘定のほうは合ってたろな？合わなきや、めし抜きだぜ」  
「へ」

お沙希はいつもの決まり文句を口にする、外股で引つ込んだ。——

「お亀、本当のことを教えて」

「えっ？何をですか？」

「私のホントのお父つつあんのこと」

「！……本当のって？」

「新蔵だつてえのはホントか？」

「……」

「ホントなんだな？」

「……どうして、そんなことを？」

「めんこい頃に、そういう噂を聞いたからよ」

「……」

「正直に言ってくれ。じやなきや、故郷いなかに帰すぞ」

「……はい。新蔵さんが、お嬢様の本当の——」

「やっぱりか。……汚ねえ」

「けど、お二人は愛し合ってたん——」

「そんなのは言い訳じゃねえか。死んだ旦那さんを裏切ったことには違いねえ。チツ」

お沙希は箸を置くと、立ち上がった。

「お、お嬢様、どちらへ」

「こんな汚れた家におれっか——！」

吐き捨てると、背を向けた。

「お、お嬢様っ！」

お沙希は涙を溜めた目で、帳場格子で算盤を弾いてる新蔵を睨み付けると、急いで出ていった。

「お、お嬢さんっ！」

理由が分からない新蔵は、不可解な顔をして、お沙希の背中を目で追った。

——お沙希は、絶望の中で身を震わせながら、木戸の前で太助が帰ってくるのを待っていた。間もなく、

「……お嬢さんじゃないですか」

太助の声がした。お沙希は振り返ると駆け寄り、その泣き顔を太助の胸に埋めた。

「……お嬢さん、どうしたんですか」

太助は優しく訊くと、お沙希のか細い背中に手を置いた。

——太助は煮売屋にうりやに誘うと、チロリ（酒を温める道具）の爛かんを呑みながら、涙の訳をお沙希から聞いた。

「……そうだったんですか」

「……え」

「……おいらのお父つつあんは、おいらが十八の時に、……突然倒れて」

「……」

「お父つつあんの跡を継いで左官になったのはいいが、全く、素質が無くて」

「……もしかして、太助さんの天職は、他にあるのかも」

「……かな？」

「……たぶん」

太助とのたわいない会話で、お沙希の気持ちは、澄み切った青空のように晴れやかに

なっていた。

「じゃあ、そろそろ帰りましょうか」

「え」

お沙希はまた、まっかつかの顔になつちまつて、まるで、金時の火事見舞いみてえだ。呑むと顔に出る質たちなんだろうが、ま、今回は少し控え目にしたせいとか、酔つてはないよ  
うだ。

「おやじ、勘定を」

「あいよ」

おやじが算盤を弾いた。

「えーと、六十六文ですな」

「え？六十六文？」

太助が納得いかない顔をした。

「あ、私が——」

太助の懐具合を心配したお沙希が巾着を出した。

「いや、お嬢さん、そうじゃないんです。払えるぐらいの銭は持ってます。ただ、勘定が合わないんですよ。酒が四十文。煮豆、煮魚、煮しめが二十四文。合わせて六十四文の  
はずだぜ。もういつペン、勘定をしてくれないか」

太助はスパツと言いつつた。

(カツコい)

お沙希は胸元で指を絡ませると、太助の横顔を蕩とろけそうな目で見つめた。

何が、カツコい。こちとら、お沙希の気持ちまで読めちゃうんだぞ。チエツ、悔しいけど、確かにカツコい。やなあ。メソメソ……(語りのすすり泣き)

「へ。確かに六十四文です。申し訳ありません」

算盤から指を離したおやは、頭を下げた。太助はボロつちい財布を出すと、勘定を済ませた。――

「ごちそうさまでした」

太助に寄り添うお沙希が礼を言った。

「あんなもんしか、ごちそうできなくて、お嬢さんに申し訳ねえ」

「そんな。おいしかったです」

「家まで送ります。今夜はおんぶはいいですか?」

「も。意地悪う」

「ハハハ……」

太助は月夜に笑うと、送り狼になったのだった。……てな訳ねえか。チキショー、手、

繋いでやるよ。ジエラシーに身を焦がして、こちとら<sup>おおよけど</sup>大火傷でい。太助さん、助けて  
く！チツ、聞いてねえや。

## 九

——太助に送られて帰ると、

「お嬢様、ば、番頭さんがっ！」

お亀が血相けっそうを変えて喚わめいた。

「どうしたんでい？」

「早くっ！」

お亀は有無を言わず、お沙希の腕を掴んだ。お沙希は太助と目を合わせると、太助の手を握った。——

新蔵は、布団の中に居た。

「どうしたのよ？」

お沙希がお亀に訊いた。

「お倒れになって。今しがた、医者が帰ったところです」

「で、医者はなんて？」

「なんでも、疲れが原因だろうとおっしゃってました」

「新蔵、でいじようぶか？」

「……お嬢さん、心配かけて、すみません」

新蔵が弱々しい声で言った。

「無理して喋るこたあねえ。ゆつくり寝みな」

「……ありがとうございます」

新蔵はゆつくりと目を閉じた。――

「もしかして、私との話を喋ったの？」

新蔵の部屋を出ると、お亀に訊いた。

「申し訳ありません。番頭さんが訊いたものですから、つい」

「うむ……やっぱりそうか」

お沙希はじじいみていな腕組みをした。

「お嬢さん」

「えっ？あつ、はい」

うつかり、太助のことを忘れていたお沙希は、慌てて体裁を整えた。

「余計なことかもしれないが、新蔵さんと親子の契りを」

「え？」

太助を見上げた。

「たった二人つきりの親子じゃないか。お嬢さんの気持ちも分からないじゃないが、父親だと名乗れなかった新蔵さんの立場も酌<sup>く</sup>んであげなきゃいけないよ」

「……太助さん」

「そうですね、お嬢様。太助さんのおつしやる通りです。番頭さんが、どれほどお辛<sup>づら</sup>かったか……」

「……」

お沙希は考える素振りで俯いた。――

「……新蔵」

「お嬢さん……」

「……ほんとのことを教えて。私は――」

「すまなかった。……お沙希」

「！……」

「……話せなかった。お前に嫌われそうで……。じゃなくても、端<sup>はな</sup>つから嫌われてたがな」

「そんなことないよ。ほんとは思いつきり甘えたかった。けど、真実を語らずに赤の他

人の振りをしていられるお父つつあんが腹が立っていた。いつも私の言いなりで、ペコペコしてはお父つつあんがイヤだった。だから、……だから」

「もういいよ、お沙希。お前の気持ちは分かつてたさ。感づいていたことぐらい。だから、今更、父親だと名乗れなかった。お前に怒られて、追い出されなくなかったから」

「ぷっ」  
お沙希は思わず嘖き出した。嬉しかった。本当の父親が新蔵だと明白になった今、お沙希は本当に嬉しかった。

「どうでい、いい話だろ？なぬう、お前は邪魔だ、引つ込んでろつて？あい。どうもすんません。では、つづきをどうぞ。」

「お前のおふくろ、お由季は、根津小町と言われるぐれいの器量よしだった。《無いもの貸し升》に奉公に來た時から、俺はお由季が好きだった。だが、身分が違う。雲の上の人だ。諦めるしかなかった。」

そんな時、入婿いりむこの話が出て、親の言うことに逆らえなかったお由季は、親の決めた男と夫婦になった。それが、亡くなった旦那さんだ。だが、旦那さんは若いみそら身空で体が弱く、寝たきりの状態だった。

そんな時、俺はお由季を奪った。お前は軽蔑けいべつするだろうが、俺はお由季を愛していた。どんな形にせよ、お由季を自分のものにしたかった。お前も誰かを好きになれば、俺の

気持ちが分かるさ」

「お父つつあん。私、好きな人がいるの」

「えっ？」

「太助さん……」

お沙希は、廊下にいる太助を呼んだ。太助は障子を開けると、お沙希の傍らかたわに座った。

「……娘をおんぶしてきた」

新蔵が確認するように目を据えた。

「改めてあいさつ挨拶させて頂きます。太助と申します」

太助が座礼をした。

「そうでしたか。付き合ってたんですか。……じゃ、もしかして、お稲さんは」

「あ、俺のおふくろです」

「……そうだったんですか」

新蔵はニヤツとした。――

ま、最終回ですからからぶつちやけますが、お由季さんは産後の肥立ちが悪く、お沙希を産んで間もなく亡くなってしまっただけですな。病弱な旦那さんも後を追うように亡くなり、お亀が母親代わりにお沙希を育てたってわけだ。一方、新蔵のほうも、番頭をし

ながらお沙希の成長を見守っていたってわけだ。

——間もなく、嘉右衛門殺しの下手人がお縄になった。案の定、嘉右衛門んちの女中の「色」、水売りの三吉さんきちだった。

「水を買ってくれているうちに、お多重たえ（女中の名）と関係ができて、お梗が床に就くという、宵五ツ頃にはお多重の開けた勝手口から忍び込んできました。

そんな時、お多重から嘉右衛門殺しの話が出たんです。嘉右衛門が死んだら、全財産がお梗のものになる。次に、お梗と夫婦になつてからお梗を殺せば、遺産が俺のものになると。そしたら、あの屋敷で二人で暮らせると……。

あの晩、遊廓の女将と昵懇じっこんだと、お多重から聞いていた俺は、お多重に一芝居打たせた。『先程、遊廓の女将さんがいらして、神社で待っているとのことです』と、お多重が吹き込むと、嘉右衛門は作り話とも知らず、宵五ツ頃、提灯を片手にいそいそと出掛けたそうだ。

神社の裏で待ち伏せしていた俺は、嘉右衛門が前屈みになつて提灯を置いた隙に、持つてきた包丁で首を刺した。そして、銭目当ての犯行に見せかけるために、提灯と一緒に金子を盗んで逃げた」

一方、お多重のほうは。

「女中奉公に来てすぐ、旦那さんに手込めにされました。こんな無器量でも女です。……心も体も。けど、旦那さんには火遊びに過ぎなかつたんです。悔しかつた。憎かつた。三十年間も仕え、耐え忍んできたのに、ご新造さんを迎えると知つた時、殺意が芽生えました。だから、旦那さん殺しを三吉さんに持ち掛けたんです」

つてことで、事件は一件落着だ。さて、お沙希のほうはどうなつたかな？

その後、お沙希んちと太助んちは交流を図るわけですが。やがて、太助の婿養子の話が出た。トントン拍子に話は決まり、お稲も付録で付いてきた。《無いもの貸し升》は、家族が増えて大にぎわいだ。

お沙希と太助は、惚れ合つて夫婦になつたんだ。俺は、スパツと諦めたよ。ただの語りだ。出る幕ないもんな。……トホホ（語りの嘆く声）

さて、お沙希は、少しは女らしくなつてつかかな？ 《無いもの貸し升》を覗いてみつか。

「お前さん。一文でも足りなきや寝かせないわよ」

なんだなんだ、太助が帳場格子に居るじゃん。新蔵はどうしたんだ？ 倒れたついでに

逝つちまったか？それにしても、お沙希は相変わらずキツイね、どうも。

「へ」

なんだ？今頃、返事か？てか、俺の語りが長かっただけか。それにしても、新蔵ん時と全く同じ状況だな。二人共お沙希には形無しか？とところで、新蔵は何やってんだ？

「まあ、イヤですわ、そんな冗談を。うふふ……」

お茶を飲みながら、お稲が楽しそうに笑ってるよ。なんか、こっちはいいムードだな。「ホントつて。山は△、川も△、木は□つてね」

新蔵は元気になつてんじやん。どうした？帳場を追い出されたか？

「そんな三角の山も、三角の川も、四角の木もありませんわ」

「これはね、画数だったんですよ。実は」

「……イヤだわ。そうだったんですね。……なるほど、面白いですね。ふふふ……」  
この二人が夫婦になるのも時間の問題だな。

「お沙希っ！親父おやじさんから小袖、借りてきたぜ。兵治さんが、殺しだどっ！」

「合点だっ！」

語り：しゅうふうていりゅうちよう秋風亭流暢  
(架空の落語家)

■  
■  
■  
幕  
■  
■  
■